

漁港・漁場・海岸の施設の設計にかかる相談事例

分類項目	地震力
相談タイトル	工学的基盤の設定について
相談者	北海道
相談内容	<p>発生頻度の高い津波を引き起こす地震動（L1 津波地震動）に対して検討する場合、必要に応じて動的応力解析（FLIP）により工学的基盤から地表面までの地震動を検討することになる。その際、工学的基盤の確認方法としては、「漁港・漁場の施設の設計参考図書」では、“実務上すべてのボーリング孔において工学的基盤層まで調査することができない場合は、代表的な地点において詳細な調査・試験を実施することにより、地震応答解析に必要なデータを確保する”とされている（参考文献：埋立地の液状化対策ハンドブック）。仮に、対象とする事業区間で、工学的基盤が深すぎてボーリング調査によって確認できない場合にどうするか教えていただきたい。また、代表的な地点及びボーリング調査を実施する間隔についても教えていただきたい。</p>
相談会の結果（対面協議：令和6年8月28日実施）	<p>水産技術研究所から以下のアドバイスを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 対象施設の重要度や対象区間長にもよるが、代表地点1点で地質を評価するのは、適切に評価できない可能性がある。事例として紹介頂いた区域のように延長が1km以上になる区間では、始点、中間点、終点のみでは間隔としてはラフかもしれない、もう少し調査間隔を狭めた方が望ましいと考える。過去の漁港整備に関するボーリング結果がある場合は、これらを活用し、代表地点として整理することは問題ない。 ● 一般的に他分野の地質調査の事例としては、100m～200m間隔で実施することが多いと思われる。そのため、現在100m毎にボーリング調査を実施しているのであれば、間隔としては妥当ではないかと考える。 ● FLIPでの照査にあたっては、工学的基盤の情報は重要なためボーリング調査での確認が基本となる。工学的基盤が確認できていないときにどのような対応ができるかは、引き続き情報を収集し、適宜情報として提供していくようにする。

注意）本資料は設計相談会の事例を示すダイジェスト版です。実際の協議では箇所名や詳細なデータを挙げたうえで、より具体的な相談を行っています。